

祖母のメール

白川友彦

「おばあちゃんね、家を離れるのはいやだって言うのよ。」

夕食後、母が深刻な顔で相談をしている。

「そうだなあ。今の家なら昔からの知り合いがたくさんいるからなあ。」

一週間前、母が訪ねていくと祖母が寝込んでいて、病院へ連れて行くという騒動があった。心配だから、私たちと一緒に暮らそうと母が持ちかけたが、祖母はまだまだ七十三歳だから大丈夫、一人暮らしが気楽でいいと言って起して来ようとはしない。

祖母の家は、我が家から車で一時間ほどの所にある。母の勤め先は、祖母の家とは反対側にあるので、帰りに立ち寄るということもなかなかできない。

「どうしたらいいでしょうねえ。」

翌朝、学校で高志がケータイを買ってもらったと、嬉しそうに駆け寄ってきた。中学校に入って塾が通い時間になったのを理由に買ってもらったという。雄一は、小学校のときから持っているの、電話番号やメールアドレスを交換している。僕だけが持っていないことになり、まったく面白くない。

「九州のおじいちゃんとおばあちゃんとも、メルアド交換したんだよ。」

これを聞いた瞬間、僕はひらめいた。

その日、母が片付けも終わって、ほっと一息ついているのを見はからって話しかけた。

「お母さん、おばあちゃんのこと心配だよ。高志がね、ケータイ買ってもらって九州のおばあちゃんとメルアド交換したら、すごく喜んでくれたんだって。それで、僕も考えた。僕がケータイで毎日おばあちゃんと連絡を取るようになるよ。安心だろう。」

僕は、おばあちゃんを心配していることを強調した。母は「えっ」というような表情をした。僕は平静を装った。

「そうね。お父さんに相談してみろわ。」

念願のケータイが手に入った。しかも最新の機種。ケータイを買ってもらった。さっそく高志と雄一とメルアドを交換した。休みの日に祖母の家にいき、使い方を教えた。

毎晩七時の時報と同時に祖母からメールが届くようになった。

「健吾、元気？ 私は元気だよ。お母さんに心配かけなさんな。」

僕も祖母とのメールのやりとりが楽しかった。

「健吾、お腹の調子はどうですか？ 冷たいものを飲み過ぎないようにね。」

僕はいねいに考えて返信メールを送り続けた。しかし途中からだんだん面倒になり、同じ内容の返信メールを出すようになった。そんなとき、予約メールという機能を見つけた。これはボタンを一回押すだけで同じ内容のメールが毎回送信できるというすぐれものだった。

「おばあちゃん、体に気をつけてね。健吾は元気です。」

とても便利で手間が省けた。

「おばあちゃん、体に気をつけてね。健吾は元気です。」

そのうち僕は祖母のメールをちゃんと読まなくなり、おばあちゃんからの着信メモディを聞くだけで、予約メールのボタンを押すようになった。

「おばあちゃん、体に気をつけてね。健吾は元気です。」

暑さが厳しい午後、祖母が軽い熱中症にかかった。ふらついて転んだ拍子にあちこち打って入院した。母はあわてて出かけていった。

この日、来ないと思っていた定例のメールが遅い時間に届いた。

「健吾、転んでしまったけど大丈夫よ。安心してね。」

僕は、ほっとしていつものように予約メールのボタンを押した。

「おばあちゃん、体に気をつけてね。健吾は元気です。」

その夜、祖母に付き添っていた母は、帰ってくるなり怖い顔をして僕に寄ってきた。

「健吾、おばあちゃんね、転んだときに右手首を骨折し、ギブスで固定したのよ。それなのに健吾が待っているからと言って、すごく時間をかけて左手でメールを打ったのよ。」

「えっ」

「ケータイは何のために買ったのよ。健吾のメールは、毎回毎回同じだった。それでもおばあちゃんは楽しんでいたって言った。」

僕は、黙ってうつむいているしかなかった。

ケータイを取り出してこれまでの祖母のメールを見た。短いけれど毎日僕を気遣う言葉が並び、同じ言葉はなかった。僕は祖母の顔を思い浮かべながら予約メールの文字をひとつひとつ消した。けれども、文字は消しても、消えないものがあると思うとたまらない気持ちになった。

次の日、朝早く父と母に祖母のお見舞いに行くと言って家を出た。病院に着くまでの時間は、とても長く感じられた。

祖母は、病院の談話室で、見舞いに来ていた近所のおばさんたちと話をしていた。遠くから見ても祖母の右手首のギブスは重たげで、唇は紫色にはれていて痛々しかった。祖母は僕を見つけると、左手をちょっと上げて、

「まあ、健吾、すまないね。」

と、いつものように微笑んでくれた。僕は、

「おばあちゃん……」

と言うのが精一杯で何も言えず、祖母の左手をそっと両手で包み込んだ。